



# 伊勢両宮 曼茶羅図

江戸時代、全国の庶民の間で生涯に一度と憧れを集めた伊勢詣で。伊勢神宮の景観や参詣者の姿を描いた鮮やかな「伊勢両宮曼茶羅図」は、御師の語りとあいまって人々の伊勢への旅情をかきたてた。

## CHRONICLE OF MIE VOL.5 【美術編】

山口 泰弘 やまぐち やすひろ  
教育学部・美術教育講座教授  
専門は江戸時代絵画史



江戸時代・17世紀 紙本着色  
165.4×178.7cm 一幅  
神宮古館蔵

**常**陸国高柴村(茨城県久慈郡大子町)の庄屋の俵、益子廣三郎は、1812年24歳の年、一念発起して87日間に及ぶ伊勢詣での旅へと故郷を発つ。

江戸を経て東海道を通り、700kmに及ぶ遠大な距離を踏破した廣三郎を迎えたのは、御師(※1)と呼ばれる伊勢神宮の神官であった。廣三郎は、全国から集まった詣で客に混じって御師の館に宿泊し、歓待を受ける。その様子は、廣三郎が残した道中記『西国順礼道中記』に詳しい。鯛、鮑や伊勢海老に始まる山海の珍味でもてなされ、夜具は絹布団と、農民廣三郎にとって生涯一度きりの贅沢を尽くしたものだ。御師のガイド付き神宮参拝、さらには二見浦詣で、芝居小屋見物など伊勢名所を巡るオプションツアーまで用意されていた。無事帰郷した廣三郎が熱く語る夢のひとつを郷里の人々はどういう想いで聴いたことだろうか。

まるで現代のパッケージツアーを先取ったかのような伊勢詣での旅。それをアレンジするのが御師であった。御師は、神官でありつつ、最高の贅沢を提供する凄腕の旅行業者でもあった。伊勢神宮は、鎌倉時代になって支持基盤であった王朝財政が逼迫するとともに、新たな支持者を開拓する必要に迫られた。まず豪族や武將、室町時代以降になると一般民衆にまで信徒を広める努力が続けられた。その先頭に立って全国津々浦々まで行脚して、伊勢講という信徒組織を構築していったのが、ほかならぬ御師たちであった。

全国を歩く御師の携行品の中には、一枚の大きな絵があった。伊勢神宮の景観と参詣する人々の様子を描いたもので、今日「伊

勢参詣曼茶羅図」あるいは「伊勢両宮曼茶羅図」(※2)などと呼ばれる。御師は、この曼茶羅の前に信徒を集めて、その内容を名調子で語り聴かせ(これを絵解きという)て、伊勢詣でへと駆り立てたのである。

この曼茶羅は、伊勢講の全国への拡がりとともに多数制作されたはずだが、現在残るものはわずか4点を数えるに過ぎない。明治以降の伊勢講の衰退で不要物になったことも一因であるが、消耗品であったことも消失



伊勢両宮曼茶羅図(部分)  
伊勢神宮の建築の白木、神明造と呼ばれる切妻の簡素な様式美にドイツの建築家ブルーノ・タウトは賞賛を惜しまなかった。しかし正殿は、朱塗り柱、千木・檼木・壁には金を施し、入母屋造で壮麗に描かれる。

要因として大きい。今回紹介する「伊勢両宮曼茶羅図」はその4点の一つで、明治初年まで内宮門前の宇治(現在の伊勢市)の御師が所蔵していた。現在は掛幅に仕立てられているが、画面には縦横に折り目の跡を留めている。折り目は24×36cmほど、ちょうどB4版程度の大きさに折り畳んで携行した名残である。

曼茶羅はもとは仏画の一種であるが、その形式を借りて、参詣者に神社の縁起や霊験を説くために境内や社殿の景観を描いた

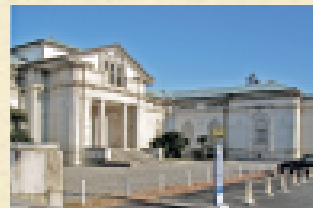
図が平安時代末から描かれるようになった。これを宮曼茶羅というが、参詣者の姿を加えて風俗画の要素を発展させたのが参詣曼茶羅で、伊勢参詣曼茶羅もその一つである。室町時代から描かれ、伊勢講が庶民の間に広まった江戸時代には需要に応じて大量に描かれた。

紙本の画面には、両宮の景観と殷賑を極める参詣道中が極彩色で描かれる。画面上部には向かって左に日輪、右に月輪が描かれて霊地であることが示されている。

画面右下、褌をする人々を見ながら宮川にかかる船橋を渡ると外宮の門前町山田に入る。外宮を参拝したあと、天岩戸で巫女舞を見て、小田橋を渡り、間の山を過ぎて宇治に入り、五十鈴川にかかる半円状の宇治橋を渡ると内宮に至る。内宮の上方には霊山朝熊ヶ岳、その左には二見浦、さらに遠く富士山を望む。

伊勢講では、皆で旅費を積み立てて、くじに当たった1人ないし2人が代参することが多かった。しかし益子廣三郎の場合、村には伊勢講がなかったので、資金の調達にはひと苦労したらしい。自己資金2両のほか家人やあちこちからかき集めた銭別8両が、旅の元手のすべてであった。現代の通貨に換算すると60万円ほどになる。そのうち3割を彼の帰郷を待ちわびる人々の土産に割いている。当時、旅費は安全のため為替に換え、土産は飛脚で送ることも多かった。トラベラーズチェックで買って宅配便で送る現代を先取りする。

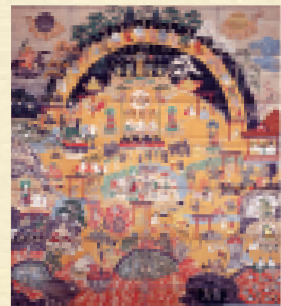
※1 伊勢神宮では「おんし」と呼び習わすが、一般には「おし」と読むことが多い。  
※2 両宮とは、伊勢神宮の二つの正宮、内宮(皇大神宮)・外宮(豊受大神宮)を指す。



伊勢両宮曼茶羅図を所蔵する神宮古館(伊勢市)。明治42年(1909)、日本初の私立博物館として開館。東京赤坂の旧東宮御所(現・迎賓館)などを手掛けた片山東熊の設計。



伊勢両宮曼茶羅図の左上に描かれた朝熊ヶ岳山頂近くにある金剛證寺。伊勢神宮の北東に位置し、神宮の鬼門を守る寺とされた。



熊野勤心十界曼茶羅図  
紀伊山地の熊野三山は古くから山岳信仰と結びついた神仏習合の霊場とされ、伊勢神宮に劣らぬ信仰を集めた。婦女子を禁忌とした山岳霊場のなかでは例外的に参詣を許したため、先達と呼ばれる男性とともに熊野比丘尼と呼ばれる女性も布教に携わった。布教の際に使われたのがこの曼茶羅である。日月を配し、その下の半円に人の誕生から死までを四季のうつろいとともにつく。さらにその下に地獄極楽のさまを描く。(津市 南河路自治会・大円寺所蔵)